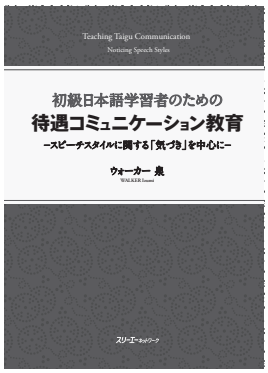

ウォーカー泉著

初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育

スピーチスタイルに関する「気づき」を中心に

スリーエーネットワーク、2011 年発行、350p.
ISBN：978-4-88319-550-3 C0081

徳間　晴美

1. はじめに

本書は、著者のウォーカー泉氏（シンガポール国立大学語学教育研究センター所長補佐）が 2009 年度に早稲田大学大学院日本語教育研究科に提出した博士論文をもとに執筆されたものである。「待遇」という観点を重視した「コミュニケーション教育」、すなわち「待遇コミュニケーション教育」を初級学習段階で実践するための理論と方法について考察した書であり、「スピーチスタイル」を切り口としてその基礎的理論の構築に取り組んでいる。

本書の構成は、以下のとおりである。

第１章　序論
第２章　研究の理論的背景
第３章　研究の焦点
第４章　実践の背景
第５章　研究Ⅰ：「観察タスク」による「気づき」
第６章　研究Ⅱ：「気づき」を促す「教授ストラテジー」
第７章　結論

本稿では、続く 2 節で各章の内容を概観し、3 節で本書の意義と課題を述べ、4 節で書評のまとめを行う。

2. 各章の概要

2.1　第１章「序論」

第１章では、はじめに、「「待遇」に関わる理解は学習初期段階から少しずつ深めていく必要があるのではないか」(p.4) [1] という筆者の教育経験から生まれた問題意識が提示されている。研究のアプローチとしては、「待遇」の諸相に関する学習者の「気づき」に焦点をあて、その促進の仕方についても考察するため、学習者と教師の双方からデータをとり、

分析を行った。また、待遇に関わる隣接領域研究を参照し、そこで得た知見を「待遇コミュニケーション教育」の理論構築に活かすことに加え、隣接領域研究に還元しようとする姿勢が示されている。これは、筆者の研究の展望を示すものと解釈できる。

なお、研究の枠組みとしては、「待遇コミュニケーション」研究（蒲谷 2000）で構築されてきた理論と、その基本的な枠組みである「コミュニケーション主体」、「場面」（「人間関係」と「場」）、「意識」、「内容」、「形式」の概念が用いられ、それらの連動の重要性が論じられている。

2.2　第 2 章「研究の理論的背景」

第 2 章では、「待遇コミュニケーション能力」を認知的観点から捉え、「待遇コミュニケーション能力」とは「適応的熟達」を必要とする高次レベルの処理能力に相当するものであり、（1）下位技能の習熟（2）言語知識の獲得とマッピング（3）評価基準の獲得（4）自己評価と調整、などに関する知識や技能が必要であると述べている。その上で、第二言語習得研究および語用論的知識の習得研究における「意識」に関する先行研究をまとめ、待遇コミュニケーション教育においても「明示的学習」と「暗示的学習」の融合が重要だと指摘している。中でも、筆者が最も重視している概念は「気づき」である。本章では、その意義とあわせて、「気づき」を促す活動である「観察タスク」（Ⅰ）と「コンテキスト化練習」（Ⅱ）に焦点をあて、その可能性と方法の検討を行っている。

研究課題としては、「待遇コミュニケーション能力」のうち、研究の焦点を初級学習段階から関わってくる待遇の要素の一つである「スピーチスタイル」にあてるとし、以下の三つを挙げている。

研究課題 1.
　初級学習者は、スピーチスタイルに関してどのような知識を持っているか。
研究課題 2.
　教育の介入はスピーチスタイルに関する「気づき」を促すことができるか。
　できるならば、学習者はどのような「気づき」を得られるか。
研究課題 3.
　会話練習における「気づき」を促すための「教授ストラテジー」とは何か。

2.3　第 3 章「研究の焦点」

第 3 章では、日本語のスピーチスタイルの特徴について整理しながら、スピーチスタイルの指導は、「待遇についての知識や運用能力を高めていく上で重要な観点となり得る」（p.51）こと、また、「教室内外の学びを真のコミュニケーション能力習得に活かすための鍵である」（p.53）ことなど、研究上の焦点をあてる必要性について述べられている。さらに、スピーチスタイル教育の諸問題に対して、「気づき」という観点から探求する理由も明確にされ、本書の副題に表されている筆者の研究上の立場が納得しやすい形で記述されている。

2.4　第４章「実践の背景」

第４章では、研究Ⅰ（第５章）と研究Ⅱ（第６章）に先立ち、筆者が実践を行ったシンガポールの日本語教育事情および、実践の対象とした初級学習者のスピーチスタイルに関する知識についての調査結果を報告している。結果としては、教科書で学習を終えていても、あるいは頻繁にドラマやアニメを娯楽的に視聴していても、スピーチスタイルに関する知識を得ることは難しいという現状が明らかにされている。

2.5　第５章「研究Ⅰ：「観察タスク」による「気づき」」

第５章では、スピーチスタイルに関する「気づき」促進を目的として行った三つの実践研究について報告し、初級学習者でも「観察タスク」を通してスピーチスタイルを切り口とした「待遇」の諸層とその連動に「気づき」が得られることを導き出した。

実践１：映像メディアを活用した授業による「気づき」
実践２：日本人小学生との接触場面における「気づき」
実践３：日本人高校生との接触場面における「気づき」

実践１は授業後に学習者が記入した調査用紙を、実践２と３は学習者のレポートをデータとして分析、整理し、概念の生成を行なった。ここでなされた提言とは、第一に、「理解」を「運用」に先行させる教育、すなわち「理解先行型教育」の提案であり、第二に、「待遇の諸要素とその連動」に関する「気づき」を促しつつ、発話の産出と理解のプロセスを加速できるような「会話練習」実施の提案である。

2.6　第６章「研究Ⅱ：「気づき」を促す「教授ストラテジー」」

第６章では、基底となる会話教育理論について考察し、「できる」学習者を育てていると思われる教師の教授行動に焦点をあて、「コンテキスト化練習」における「教授ストラテジー」を分析している。調査の結果、以下の７つの教授ストラテジーと下位ストラテジーを見出した。（＜　＞：教授ストラテジー、「　」：下位ストラテジー）

＜文脈化ストラテジー＞

「コンテキストの設定」「コンテキストの提示」「コンテキストの展開」

＜談話構築ストラテジー＞

「会話の自然な終結」「基本・応用・拡大会話の構築」

＜会話支援ストラテジー＞

「問い直し」「参加者交替による提示」「役割交代による提示」「説明」

＜参加者管理ストラテジー＞

＜話題管理ストラテジー＞

＜自動化促進ストラテジー＞

「繰り返し」

＜訂正ストラテジー＞

本章では、上記のストラテジーのほかに、より自由度と創造性の高い「会話練習」（パ

フォーマティブ・エクササイズ）についても、実践例とともに、詳しく紹介されている。

2.7　第 7 章「結論」

第 7 章では、研究課題（2.2）についてのまとめを行った上で、「待遇コミュニケーション教育」への四つの提言がされている。第一に、「待遇コミュニケーション教育」は「理解先行型教育」が望ましいということ、第二に、「理解先行型教育」では、「明示的学習」と「暗示的学習」を融合した教育が効果をもたらすということ、第三に、「理解先行型教育」では「明示的学習」と「暗示的学習」、そして「振り返り」の三つの循環が重要であるということ、第四に、学習初期段階における「待遇コミュニケーション教育」は、スピーチスタイルを中心に進めると効果的であるということである。

3. 本書の意義と課題

本書を貫いているものは、筆者の日本語教育経験に基づく「待遇コミュニケーション教育」、中でも「スピーチスタイル教育」への「問題意識」と「改善の可能性への期待」と言ってもよいだろう。国内における日本語教育であっても、待遇表現の学習あるいは待遇という観点そのものは、学習者への負担の大きさ故に教育内容から切り離され、「後回し」あるいは「先送り」にされることも少なくない。情報化社会により日本語との接触が増えてきたとは言え、海外においてその傾向は未だ日本より強いことが予想される。そのような中、日本語でのコミュニケーションにおける「待遇」の観点の重要性を論じながら、現状に対して警鐘を鳴らすかのような筆者の意欲的かつオリジナリティに富む研究は、非常に意義深いと言える。

本書が示し得た具体的な成果をまとめてみる。まず、研究 I により、初級学習者のスピーチスタイルは、活動に「しかけ」をして「気づき」を促進することで、「待遇」の諸層とその連動について、実際に「気づき」を促すことができ、さらに、それを繰り返すことで、「気づき」は「理解」や「認識」へと進むことを導き出したことである。そして、具体的な教育方法として、「理解先行型教育」を提言し、並行して発話の産出と理解のプロセスを加速できるような「会話練習」の必要性を主張した。後者の提言については、目の前の現実に目を背けずに臨んだ筆者の姿勢が窺えるものであり、授業実践の現実的な難しさを経験したからこそのものである。続く研究 II では、「コンテキスト化練習」における「教授ストラテジー」を七つ見出した。これは、参与観察中に得た実感（「これが「会話練習」における「気づき」を促進する方法であると筆者は確信した。」（p.240））に基づき調査と分析が丁寧に進められた結果である。ここでは、第 2 章で捉えた「待遇コミュニケーション能力」を形成する四つの知識と技能の向上との関係についても考察し、「待遇コミュニケーション」の教育においては、複数の「教授ストラテジー」が用いられる重層的な支援が重要であることを具体的な内容とともに明らかにした。さらには、学習が少し進んだ段階に適した「会話練習」として、「パフォーマティブ・エクササイズ」の実践方法についても詳しく説明し、学習段階別の教育方法も示している。以上の点において、本書の研究成果が認められよう。

一方、本書の意義としてはじめに筆者が述べていた、「隣接領域研究への還元」については、本書の中で少しでも具体性あるいは方向性を示してもらいたかったと感じた。近年、筆者が行った講演[2]は、本書での研究が基礎部分にあると考えられるが、「日本の敬語・待遇表現研究と世界の教育研究との相互発展の第一歩」（p.5）となる展望が、本書のまとめとして窺い知ることができたら、一人の読み手として、また、待遇コミュニケーション教育に関心を持つ一人の教師としても、今後の可能性がより鮮明に描けたに違いない。

4. おわりに

本稿では、『初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育―スピーチスタイルに関する「気づき」を中心に―』について、その概要をまとめ、日本語教育における意義を示した。

あらためて特筆すべきは、緻密なデザインのもと、自身の教育現場を舞台として、学習者と教師の双方向からアプローチするというダイナミックな研究に挑み、時間をかけて丁寧にデータの分析が行われていることである。このことにより、研究成果として得られた数々の知見が立体的に描き出され、初級日本語教育やコミュニケーション教育を行う教師はもちろん、世界各国で日本語教育に携わる人々に対しても、多くの示唆を提示し得る書となったと言えよう。

注

1　これ以降、『初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育―スピーチスタイルに関する「気づき」を中心に―』からの引用箇所については、書名は記さず、該当ページのみを記載する。

2　「プロジェクトワークの実践―コースデザインから評価まで―」（2013 年 7 月 11 日　於：学習院大学）、「大学生のためのビジネス日本語教育：社会的行為体得のためのアプローチ（2014 年 7 月 5 日　於：学習院大学）

参考文献

蒲谷宏（2000）「「＜言語＝行為＞観」に基づく「日本語教育学」の構想」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』13:15-26

（とくま　はるみ　早稲田大学日本語教育研究センター）